理事会開催

一、日時　昭和卅三年十一月廿一日
　　午後三時
一、議題
　1　役員任期満了の件
　2　三十四年度番組決定の件
　3　定款第五条審議の件
　4　其他

以上

各流　仕舞・謡
袴　紋付　専門
帯　匠
もちや
市川市真間町三丁目九一〇
蘭部好伸
電話市川(07)八二一二

百々裏話(19)

おもて　あきら

松風　古くは松風村雨とも言った。「申楽談儀」の、能の作者に関する記事の中で、松風村雨を「世子作」としている(1)から、この曲の作者は一応世阿弥と考えられる。但し「能作書」には、

　松風村雨、昔しほくみ也。(2)

とあるので新作ではない。塩汲は「五音」に

　シヲクミ　亀阿弥

指ソレシヲヽロヲウスル身ニアラズハ

と出ているので、世阿弥の先輩で音曲の達人であった田楽の亀(喜)阿弥の作曲であることが判明する。「申楽談儀」によると、世阿弥が逆髪の能を作った頃には塩汲もまだ演じられていた。右の文句が今の松風に残っていないことや、同じ「能作書」の「恋のおもに、昔あやの大こ也」などを参照すると、塩汲から松風への改作は、かなりの大改訂であったと思われ、あるいは翻案程度かも知れない。また「申楽談儀」(15につづく文)には、松風のロンギが昔の藤栄のロンギであったと述べている(3)から、塩汲以外の曲をも参照していたわけである。一方「五音」には、

　松　風　亡父曲
心ツクシノ秋風ニ　(4)

松　風　後ノ段(作曲者名が無いのは世阿弥作曲としていい)

ゲニヤ思ヒウチニアレバ　(5)

と、二ケ所に別々に掲げられているので、後段は世阿弥の作曲、前段は父の観阿弥作曲であったと思われ、観阿弥も松風の作に関係しているようである。あれこれ総合すると、亀阿弥作曲の塩汲を基にして、観阿弥がまず松風の原作を作り(藤栄のロンギを借用したのも観阿か)、その後段を改めて、現在の形に変更したのが世阿弥らしい。このような複雑な過程を経て出来上った能は、松風以外にも少なくないようであり、能の作者を一人にきめてしまうことは甚しく危険である。

さて、このようにして作られた松風は、かなり好評であったらしく、「能作書」の「近来押し出だして見えつる世上の風体の数々」の中の女体の能に、松風村雨が入っている(6)。世阿弥にとつても自信作だったようで、

○ただうき船・松風むら雨などやうの能に相応たらんを、無上の物としるべし(7)

と二男の元能に語り(申楽談儀)、また

○松風村雨、籠深花風の位か(8)

と、九位の上三花の第二位に擬していること(申楽談儀)からも、それが察せられる。現在の松風に対する評価は、世阿の自信を上廻るほどのものがあるが、世阿弥が九位の最高の妙花風とは、井筒や砧の方を高く評価しているのは面白い。

○松風村雨、ことをゝき能なれ共、是はよし。(9)

○これにて入かはる能はかきやすき也。

第七回華の会

12月21日PM2時
於観世会館

能　井筒　静夫
狂言　空腕　万之亟
能　恋重荷　寿夫

私が能を好むのは、能を見ている間に、精神の新しい秩序がえられる喜びのためである。その新しい秩序は、ほかのいかなる舞台芸術によつても味えることのできない伝統的で、清新な、協和にみちたものであつて、おそらくいかなる人も意識的、無意識的にその喜びを深々と感じていることであろう。私は特に若い世代の人たちに、何ものともかけがえのないその喜びを味つて貰いたいと思つている。

青野　季吉

其まゝする能は目にはなれたる所をかくべし……松風むら雨などぞ、其まゝにて入かはりたる能成。「うしともおもはぬ」云すてゝひそとして有所也。（10）

など（申楽談儀）は、本三番目物とは違う松風の内容と形式上の特色を、そのまま言い現しており、世阿弥の目の確かさが知られよう。世阿弥はまた、演出上の微細な点にまで配慮を怠らなかつた名人であり、松風についても次のような記事が「申楽談儀」に見えている。現在の型との相違はどうであろうか。

○松風むら雨の能に、「わがあとゝひてたび給へ」の所よりよらば、風ぜいのぶべし。「わがあとゝひて」返はかかへてもちて、「いとま申て」と云所よりよりて「かへる」と云ときかへれば、をもしろき也。「松風斗や残るらん」に、「のこる」から帰るほどに、面白もなき也。「らん」からかへるべし。殊にかやうの所、心ね風ぜい相応なくは、面白も有べからず。（11）

また、「五音曲条々」に、恋慕音曲の代表として、班女と松風の後段があげられている（12）のでも知られるように、世阿弥当時から音曲としても名曲であつたらしく、松風の音曲についての記事も「申楽談儀」に散見する。

○松風に、「あまの家、里ばなれ成かよひぢの」、「あまの家」をおもく、「かよひぢの」をかるくいふべし。（13）

○松風に、「月は一、影は二、みつしほの」、「みつ」とうつる所にこは枕をちともつべし。こは枕とあらはれたるはわろし、心ねにもつべし。（14）

○松風に、「よせてはかへるかたをなみ、あしべのたづこそは立さはげ、よもの嵐も音そへて、夜さむ何とすごさん」など、面白きふしなれ共、はや第二におつ、此「よものあらしも音そへて」、よすべし。こゝこはき位有。うへよりいひておとす也。喜阿かかり也。此ふし、喜阿かかりうたふ人は、猶好むべきか。下より「よさむなに」と云は、細川右京兆なをされし也。いなりの能のころ也。……（15）

ここに見られるような細心の注意が積重なつて、現在のような名曲松風を磨き上げられたのであろうが、最後の例によると、当時の観客（ひいき）には、フシの細部にわたつて意見を言うほどの目利がいたわけで、そのような目利と、その意見を採り入れるほどの能の自由さとがあつたからこそ、松風のような名曲も生まれることができたのであろう。

以上、世阿弥の伝書に見える松風についての記事を抜書してつなぎ合わせたに過ぎないが、なまじつかな見解を添えるよりは、原文を列挙しただけの方が面白そうである。右にあげた十五の引用で、松風についての世阿弥の記事はすべてであり、このように数多く世阿弥伝書に曲名が現れるのは、松風だけである。当時から人気曲であつたことの反映と解すべきであろうか。（33・11・30）